

## 地図に見る北海道の川

堀 淳 一

明治中期に北海道庁が刊行した二〇万分一実測切図と、ほぼ同時期に陸地測量部（現在の国土地理院の前身）から発行されていた二〇万分一輯製図の北海道の諸図幅とを見比べると、大きな相異があることに気がつく。

実測切図が三色刷で、地形が等高線で表現されているのに対して輯製図が一色刷であり、ケバによって地貌が描写されているなど、図観の相違も大きい。内容もずいぶん異なる。中でも著しいのが、前者では川の名前が、本流や主な支流はいうに及ばず短小な枝川に至るまで実にこまかく記入されているのに、後者では河川名は本流と主要な支流にしかつけられておらず、きわめて大ざっぱなことである。他方、これを裏返しにしたように、前者では山間部にほとんど地名が記入されていないのに対して、後者では、こんな山の奥まで、と驚くほどカナ書きのアイヌ地名がビッシリと書きこまれている。

北海道庁は、明治二〇〜二九年に、簡易測量によって北海道仮製五万分一地形図をつくったが、前記の実測切図もこのときの測量に基づいて調製されたものである。一方、二〇万分一輯製図は、三角測量に基づく五万分一地形図と二〇万分一帝國図（今の二〇万分一地勢図の前身）が整備される前の応急の需要をみたすために、各種の資料からの編集によって作製された地図である。北海道の二〇万分一輯製図がどういふ資料から編

集されたのかはつまびらかでないが、おそらく伊能図に加えて、三県時代の明治一六年から一七年にかけて内務省地理局が行った地理調査の結果などによっているものと推察される。

実測切図と輯製図との間の前述の相異には、これらの地図の作製主体のちがいが大きく反映しているものと思われる。

日本の地図では、集落や道路にくらべて川のウエイトが概して小さかった。江戸時代の日本全国には、川が全く記入されていないことが多い。たとえば寛文二年に発行された新改日本大絵図、元禄の頭馬淵自庵庵が作製した改正大日本全国などには、集落と道路と国の境域が記載されているのみで、川は一切描かれていない。元禄四年の石川流宣の日本海山潮陸図には川が現れるが、東海道の筋の天竜川、大井川その他五本ほどが描かれているだけである。安永八年の長久保赤水の改正日本輿地路程全図には、さすがに主要河川が多数記入されているが、河川名の記入は大河のみに限られている。有名な伊能図においても、河川は街道沿いのものしか描かれていない。もっとも伊能図は実測図であり、その実測が行われたのは海岸と街道筋のみであったから、これは当然のことかもしれない。しかし、川口付近の川筋や、街道筋の川に合流してくる支流の合流点付近の様子などは、描こうと思えば描けるはずであるのに、めったに示されていないことから

みると、河川に対する関心がやはり稀薄であった、と考えられるのである。

もつとスケールの大きい地図、たとえば函図では、さすがにかなり細かく河流が描きこまれているが、河川名は依然としてはなほだおざなりにしか記入されていない。慶長年間につくられた播磨国絵図には、かなりの小さな支流までが描きこまれているにもかかわらず、河川名となると、市川、揖保川、加古川などの第一級の川の名すら記入されていない。寛政二年の山下重政の播磨国細見図では、明石川、市川、完栗川などの名が見えるが、千種川は無名のままである。この他の国絵図や細見図などでも事情は大同小異で、もちろん例外はあるにしても、河川名は一般に甚だしく閑却されている。

この傾向が明治時代に入っても続いた結果、陸地測量部などの中央国家机关の手で作られた地図では、一般に河川名の注記密度が小さくなったのだ、と思われるのである。河川名に重きがおかれないのは、日本人が古くから農耕民族であつて、生活圏がせまく川は田に水を引く源として自らの住む付近に存在しさえすればこと足り、川筋を遠くまでたどつて、源流や他の川筋とのつながり具合をたずねたりする必要がなかつたためであろう。また、川自身が多くは短小なうえ、急流であつて、大規模な舟運に適さなかつたことも、生活圏のせまさかと相伴つて、川に名前をつけ、一つの川全体および川との関連を客観的に把握する必要を、あまり促さなかつたのであろう。

ところが夷蝦図においては、事情はガラリと異なる。夷蝦地の地理に関する知識が海岸付近に限られていた頃の地図は別として、知識が内陸に及んでからの地図には、河川網・河川名が著しく細密に記入されている例が多いのである。文政九年に高橋景保のつくつた夷蝦図や、松浦武四郎の蝦夷山川取調図などの、幕末時代の地図は、ほとんど例外なく、河川網図といつても過言ではないくらい、河川網・河川名の記載が詳密である。この特徴は明治になつてからも失われず、たとえば明治八年に開拓使の地理課が製作した三角術測量北海道図でも、他の地名にくらべて河川の名の密度が格段に大きいし、大正元年に北海道鉄道管理局の出した北海道網走線全通記念北海道地図も、河川名の詳密さが異様なほど目立つ図である。

アイヌ人は狩猟、漁撈民族であつたから、魚が棲息したり遡つたりする場所であり、また狩猟のための道となる川は、第一義的に重要な存在であり、しかも単に身近にあればよいというのではなく、川口から源流までの川筋全体、さらにまた峠を越えた山の向

こうの他の川筋とのつながり具合を客観的に認識することが、生活上不可欠な存在であつた。このために、川の名が非常に詳細につけられることになつたのだと考えられる。

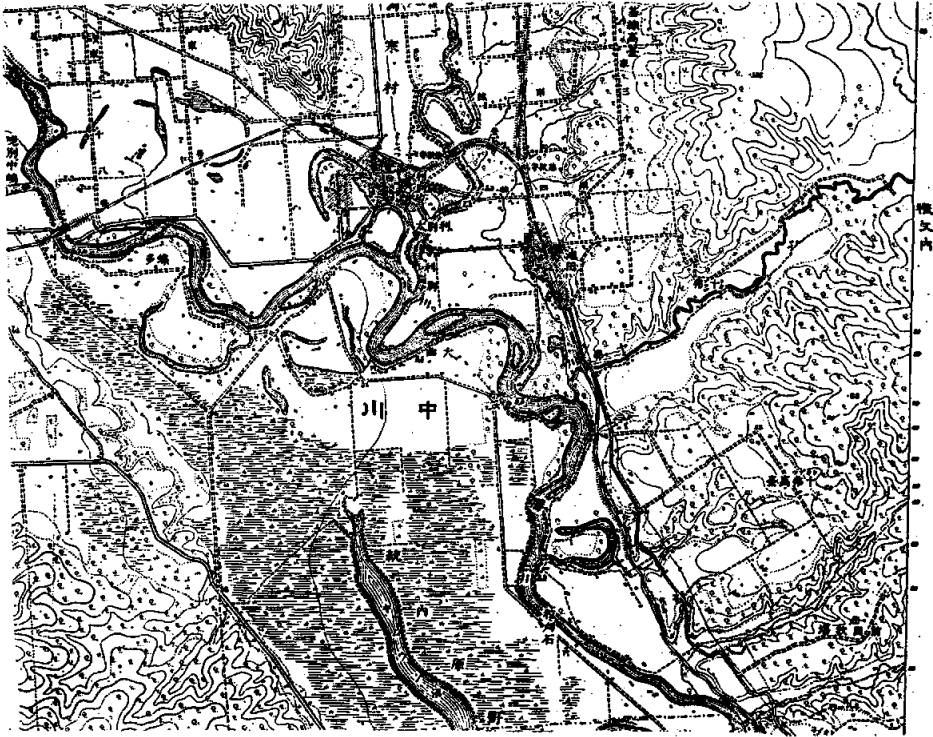
北海道の地図が作られるはじめた頃にはろくに道路がなく、地図を作るにはアイヌ人の案内によつて川をさかのぼり、彼等から川の名や沿岸の地名を聞いて、それを忠実に記載するはかばかかつたから、河川名が著しく詳密になるのは、必然的なことであつた。本州の地図において河川名が閑却されたのが農耕民族である日本人の生活意識の反映であつたのと同様に、北海道の地図における河川名の詳密さは、狩猟民族であるアイヌの生活意識の反映だったのである。

その影響が明治以後にも濃厚に残つて、和人がアイヌ人に直接にはたよらずに作つた地図においても、作製の主体が北海道にある場合には、河川名の詳しさが特徴となつたのであろう。これに対して、陸地測量部調製の二〇万分一縮製図においては、河川名が閑却される傾向の強かつた日本の地図の伝統が、受けつがれていたのである。

基本地図の作製が全面的に中央の手に移つてからは、河川名記入の密度に関する北海道の地図の特色は大幅にうすれたが、ほとんどすべての河川名がアイヌ語の原名を多少とも保存したカナ書きの名であるというもう一つの特色は、今でも強く残つている。カナ書きが漢字表記に交つたものはかなりあるけれども、その場合でも発音は原名のおもむきを比較的よく残したものが多く、和名で置きかえられたものは少ないのである。これは、河川名以外の地名、とくに集落名が明治初期から漢字で表記される傾向を強く持ち、したがつて発音がアイヌ語の原名から遠ざかりやすく、また明治末期以後には、原名とかかわりのない和名で置きかえられるものが多かつたのと対照的である。要するに河川名は漢字化・和名化されにくく、そのため、アイヌ語の原名により近い名称が、よく保存されているのであつて、これが北海道の地図の特色に、今でもなつてゐる。

ただし、これはあくまでも相対的な話であつて、たとえばカナで書かれていても、原名からひどくへだたつてしまつたものがあることには、注意しなければならない(後述のユカンボシ川の例参照)。

河川においてアイヌ名が比較的よく保存されたのは、やはり河川名に対する和人の農耕民族の態度のためであらう。集落名は和人にとつて非常に身近であり、大切なものであるがゆえに発音もなじみにくく、意味もわからないアイヌ地名が敬遠され、少しでも

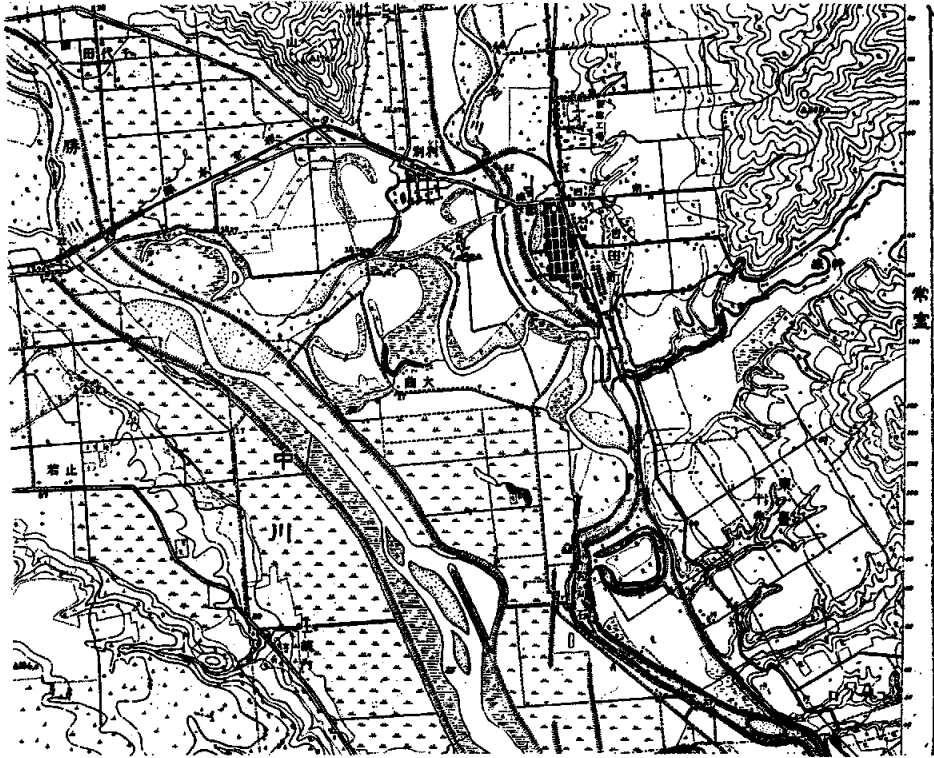


和名的な感じにするために漢字で表記したり、アイヌ語の意味だけをとって和名化した  
り、あるいは全く新しい和名でおきかえたりすることが積極的に行われた。河川名はこ  
れに対して、和人にとっては集落名よりはるかに重要度の小さいものであったために、  
かえって漢字化、和名化をまぬかれたものが多かったのだ、と考えられる。やや極端な  
言い方をすれば、河川名は無関心のままほっておかれたのである。小さな支流の名  
前などは、実生活において口にされることも少なかったであろう。実際、地図上には  
今も残っているエメイシオコナイ川、パンケオートヌオマップ川、ピシタシュウツナイ  
川などという長くて発音しにくい名前が、日常生活でいつも使われているとは考えにく  
いのである。

地形が概してなだらかであるのと、人文景観が粗であるために、北海道の地図は一般  
に間のびした図観をもっており、今なお原始的な味わいが、多くの図葉からだだよつて  
くる。その味わいをさらに深くしているのが、カナ書きの、あるいは漢字書きでもアイ  
ヌ地名のおもむきを濃く残した、河川名の注記だ。これはまた、原名の形を比較的良好  
に伝えているため、アイヌ地名の研究において貴重な手がかりとなることが多い。河川名  
は、北海道の地図に風土感を与えるために、またその風土の歴史をさぐるために大きな  
役割を果たしている、と言えよう。

この役割が、河川名を等閑視するという和人の性向によってもたらされたのは、皮肉  
なことである。蝦夷地・北海道の風土と歴史を大切にするという態度は、入植者たちにも、  
また北海道の都市に流入してきた本州人たちにも、はなはだ稀薄であり、「内地」  
志向がはるかに強かった。地名が急速に漢字化、和名化されていったのも、そういう意  
識のあらわれであろう。河川名は相対的に彼等の関心の外にあったために、「内地化」  
をまぬかれたわけであった。

しかし、最近になって、蝦夷地時代からつながる北海道の歴史・風土をふり返り、また  
これらを土台にしてものを考えようという土着的傾向が、ようやく芽生えてきたよう  
である。アイヌ地名に対する関心や、アイヌ地名を保存しようという意識も、わずかなが  
ら生まれてきたように思われる。地名が歴史の遺産であり、一種の文化財であることは、  
アイヌ地名に限った話ではないけれども、北海道においてはアイヌ地名がとくに文化財  
として貴重な意味をもつことはいままでもない。前記の河川名は、この意味で、いまだ



和名化されずに残っている一般地名とともに、軽々しく改変せずに行きだけ保存するべきものであろう。

自然保護の誌上で文化財保護を説くのは、一見、場ちがいのようである。しかし、自然保護と文化財保護とは、決して別々のことではないはずである。自然保護といっても、全く人為を加えない野生の自然を、そのまま形で保存するという意味では、必ずしもないと思われる。人間生活の一部、あるいはその環境として意識される自然界を、それが人間にとって（近視眼的には）大きく見て、貴重なものだと考えられた場合すなわち、人間の文化の要素として重要と考えられた場合に、それらを保護してゆくという意味であるから、広い意味では自然保護も文化財保護の一つと考えることもできるであろう。河川名はもちろん自然そのものではないけれども、人間の河川に対する意識を表現したもの、すなわち自然に対する意識の一つの表現であるから、それを保護するということは、河川自体を（文化の一要素として）保護すること、意識の上で密接に関連すると思うのである。

さてそこで、今度は河川自体を地図で眺めてみよう。

自然河川に近い状態から、いちじるしく人手が加わった、いわば人工河川の状態に至るまでの大きな変化を、正確な近代地図上でつぶさに見ることができなのが、北海道の川の特徴である。本州の川、とくに大きな川は、精密な測量が始まった明治初期に、すでにかなり人手を加えられていたので、その自然河川時代の状態を正確な地図上で見ることがむずかしいのである。

一つの例として、十勝川とその支流の利別川の変遷をたどってみよう。明治四十二年部分修正測図の北海道仮製五万分一地形図「池田」を見ると、二つの川の両岸にはすでに耕地がかなり開け、釧路線（現在の根室本線）と網走線（現在の池北線）も開通しているにもかかわらず、川岸には堤防が全くなく、両川ともほとんど原始河川そのまま姿で、ひどく曲流しながら流れている。橋も鉄道橋を除いて皆無であって、数カ所に渡し舟があるにすぎない。十勝川は池田より南で谷の東縁にかたよって流れており、西岸では耕地は自然堤防の上に開かれているのみで、谷の西半の広大な後背湿地帯には開拓の手が及ばず、広漠とした湿原がひろがっている。湿原のただ中に横たわる蛇のような形のキムウン沼が印象的だ。

十勝池田（昭和45年編集）



大正九年測図の五万分一地形図「十勝池田」でも、流路が若干変化してはいるが、川の姿は全体としてさほど変っていない。池田市街が大きく膨脹し、町の西方に橋がかけられたのと、十勝川西岸の島地がキムントー沼（アイヌ語の沼に日本語の沼がつけ加わって二重地名になっている）の岸まで達しているのが目立つ程度である。

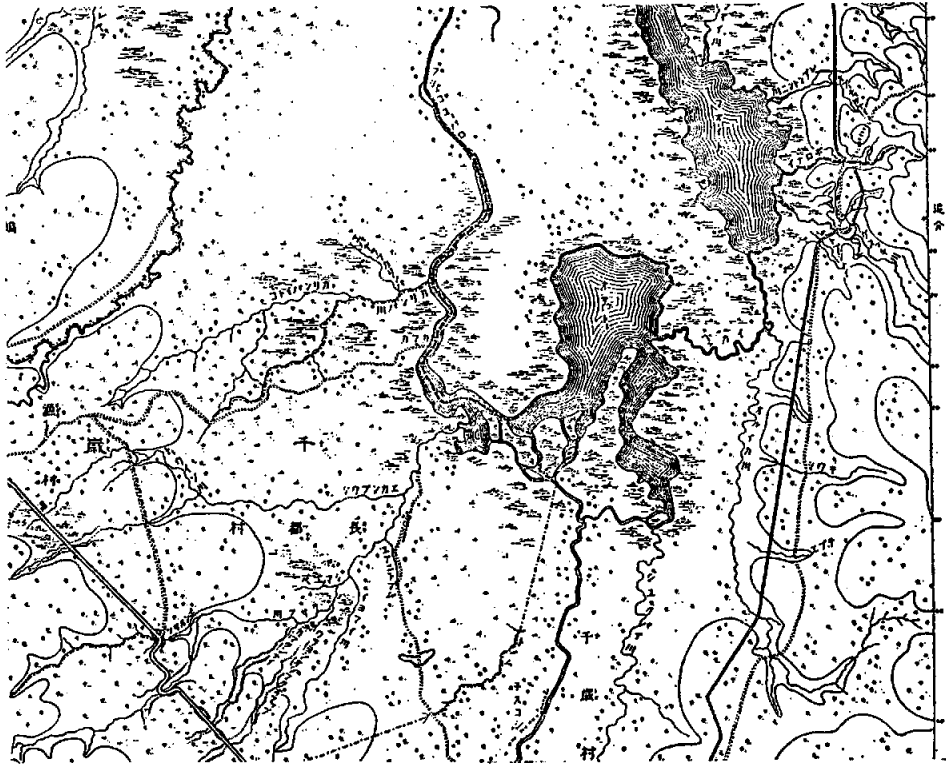
昭和十九年部分修正測図の五万分一図で、川の様相はガラリと変る。十勝川の流路は、谷の中央を堤防に守られて直線状に走る流路に切りかえられ、キムントー沼は姿を消してしまっている。利別川も流路の一部が切りかえられ、河跡湖の埋め立てや堤防工事が進んでいる。利別川の谷の西縁と、十勝川の谷の大部分が水田化されたこともいじろしく眼を惹く。

昭和三十一年測量の図では、十勝川と旧十勝川間の水路が完成に近づき、四十五年編集の図ではこれが完成して利別川と十勝川がつながり、利別川および利別川の一部分と化した十勝川旧流路の両岸の堤防が完成している。利別川から堤防によって切り離された十勝川旧流路の残りの部分は、あるいはやせ細り、あるいは河跡湖と化してしまっている。なお、昭和三十一年の図では、十勝川兩岸の水田がごとごとく島に変っているが目立つが、四十五年の図では水田が一部復活している。

昭和四十九年修正の図は、利別川西岸の古い堤防の内側に、もう一本の堤防が現れているほか、四十五年のものとはほとんど変らない。

気ままに湿原の中を曲流していた川が、急速に直線化されるとともに堤防の中に閉じこめられてゆくありますが、このように地図の上で劇的に眺められるのである。しかし本州では堤防の外の氾濫原がほとんど完全に耕地化されているのに対して、北海道では氾濫原の随所に湿原や河跡湖が今も残っているのは、うれしいことである。改修工事が最も進み、直線化の結果長さが当初の三分の二に縮まってしまった石狩川でさえ、兩岸に数多の河跡湖を残している。そして、その河跡湖の多くは、柳の生い茂る湿地や河原の奥に静謐な水をたたえて、原始河川時代のおもむきを味わわせてくれるのである。

このような水辺にたたずむときに感じられる何ともいえない心のやすらぎは、人間にとってなくてはならないものではないだろうか。何でもかでも川を堤防の中に閉じこめて直線化し、海へ海へとひたすらに水を追い流す高水治水方式は、いま反省期を迎えているようだが、単に治水・利水の観点だけではなく、精神的な面での人間と水との



触れあいが、もっと大事にされなければならないだろう。これらの河跡湖や湿原も、できるだけ自然保護の対象としたいものである。

もう一つ、小さな川の例を挙げておこう。

明治二十九年の北海道仮製五万分一地形図「長都」を眺めると、現在の長沼町、恵庭市、千歳市にまたがる低平な地域が、当時は見渡すかぎり原始林と沼と湿原であったことがわかるのだが、さらによく注意すると、西方の火山灰台地から流れ下ってオサツ川に入るオサツ川(図上の表記はヲサツ川)、エカンブウシ川、カリンバ川などが、台地の裾のあたりで破線で描かれていることに気がつく。これらの川は、それぞれのつくるゆるい扇状地面の末端近くで伏流になっていたのである。大正五年および六年測図の五万分一地形図「魚」では、カリンバ川は耕地化によって姿を消してしまっている。エカンブシ川(ブウシがボシに変わってしまった)と長都川は残っているが、伏流部分は描かれていない。この二つの川の流域もかなり開拓されてきてはいるが、川自体はまだほぼ原始河川のままである。

昭和十年修正測図の五万分一でも、耕地の半分くらいが水田化されているほかは、状況はさして変わっていないが、昭和三十五年修正の図では、めざましい変化が起っている。昭和二十六年からはじめられた馬追・長都沼周辺の灌排事業によって、沼は大部分姿を消し、千歳川の新水路が開かれて、長都川とエカンブシ川は合流せずに、別々に新水路に入ることになった(エカンブシ川が、ここでさらにエカンブシと変わってしまった)。これはおそらく、文字の写し誤りであろう。カナ書きだからといって、アイヌ語の原形に近いとは限らないことの一例である)。

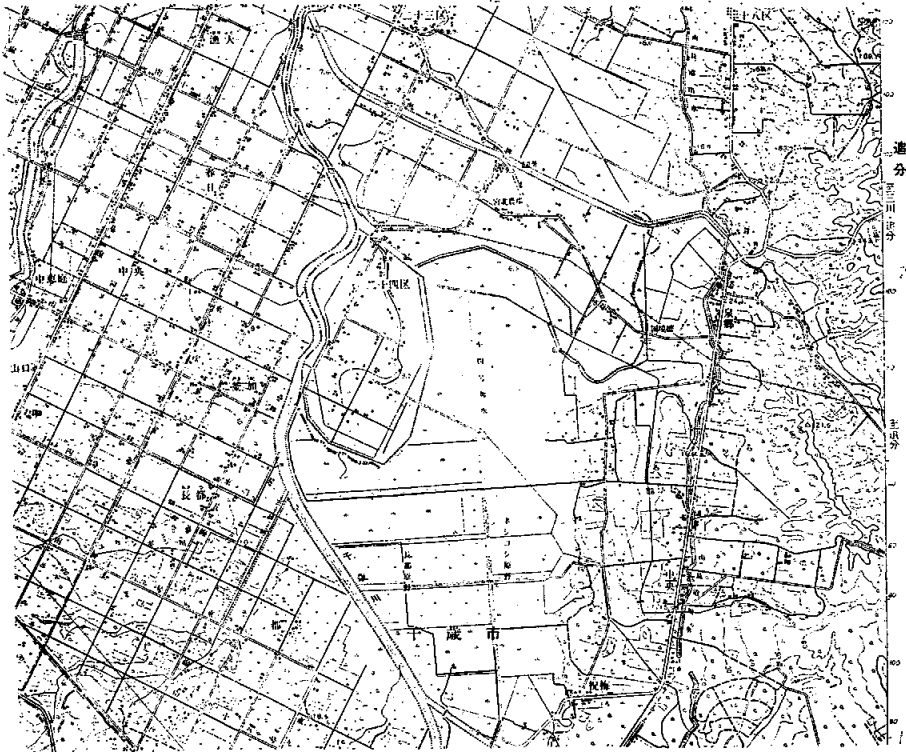
昭和四十三年編集の図では、沼は完全に消え去る寸前となり、長都・エカンブシ川の下流部が直線化されているのが目立つ。四十七年修正の図では、沼は全くなくなっている。そのむかし、千歳川が原野の中を曲りくねり、幾本にも分流しながら長都沼へ入っていた原始景観は、排水路が縦横に走る畑と平原に、すっかり変貌したのである。エカンブシ川と長都川の直線化はさらに進み、長都川の下流部は堤防に守られ、エカンブシ川の下流部は東に直角に折り曲げられて、ふたたび長都川へ入ることになった。

五万分一地形図(昭和十年以後「恵庭」と改称)はその後昭和五十二年再編集されたが、これは四十七年の図とさほど大きく変わっていない。

惠 庭 (昭和35年修正)



惠 庭 (昭和47年修正)



このように全長一〇キロメートル余にすぎない小河川も、原始河川から人工河川への大きな変貌をまぬがれてはいないのである。

いま、長都川の下流を歩いてみると、完全に直線化され、だだっ広い空間の中にむき出しにされてしまった川の姿の味気なさが、胸にしみる。ただ、空缶やビニールくずが無遠慮に捨てられているおぞましい光景の見られないのが、救いではある。近頃は、都会の場末の川のきたなさはいうまでもなく、人里離れた田舎でも、地図の上では趣豊かな水辺に見える川のほとりが、すっかりゴミ捨て場と化していることが多い。人目につかないのをいいことに、平気でゴミを捨てるらしい。しかし、長都川下流のようにはげつるげになつてしまうと、さすがにゴミを捨てるのははばかられるのであろう。直線化のケガの功名とはいえ、結構なことである。

このように人工河川化のいちじるしい一帯だが、長都川の上流部には、ミズバショウの叢生する谷地や小さな沼が、いまま雑木林のしげみにかくれて静かに息づいており、もと長都沼のあった一帯は、灌排工事が終わったあとも、なお茫漠とした草原として残されている。これらのささやかな自然景は、いつまでその姿を保つてほしいものだ

地図を毎日のように眺めているのだから、何か書けるだろう、と軽く考えて執筆をおひきうけたのだが、書きはじめてみたら、もつと時間をかけて深く考えをめぐらす必要があることに気がついた。しかし、締切日がせまったので、資料の渉猟と考察が甚だ不十分なまま、忽卒に一応まとめざるを得なくなつてしまった。従つて多少速断にすぎた部分があるかもしれないが、御容赦いただきたい。他日稿を改めて、より十分な議論を行いたいと考えている。

(北海道大学理学部教授)

北海道仮製五万分一地形図「池田」(明治四二年部分修正測図)

五万分一地形図「十勝池田」(昭和一九年部分修正測図)

五万分一地形図「十勝池田」(昭和四五年編集)

北海道仮製五万分一地形図「長都」(明治二九年測図)

五万分一地形図「恵庭」(昭和三五年修正)

五万分一地形図「恵庭」(昭和四七年修正)